夢

森鷗外

カントが発狂の階梯だと恐れた夢を自身に検究する事に再び着目したるは、新約克のジユリウス、ネルソンJulius Nelson です、既に記録した夢の数は四千あつて、短いのは一語で写され、長いのには百語を費す、ネルソンは夢を区別して晩夢、夜夢、朝夢の三としたり、晩夢は疲労の日に継ぐもので、大抵日業の継続から悲壮的（トラーギシユ）の結末を示し——昼間氷鞾の戯をなし夕にもこれを夢み遂に僵る——醒める時には筋肉の劇動をし又は叫喚す、夜夢は日間神経の刺衝興奮に継ぐ——火災の後に烟火の昇るを、点竄をなす後に難符号の出るを、聴楽の後に音響を夢みる——飲酒はこれを促す、

朝夢は安眠の間に貧血になつて居たのが充血するの結果、その充血の少ない時には後で僅に夢を見たと思ふのみ、充血が多ければこれを記憶す、凡そ夢の中で面白いのは朝夢で平生忘れて仕舞た瑣末な事が思ひも掛けず浮き出し様々に変化せられ、敷衍せられ、走馬燈の如く、劇部の場面の如く、時間も空間も放縦自在となり、頃刻の間に数十年の事を瞥見するは独り邯鄲の枕に依る計りではなし、

次にネルソンは夢記の単複で夢の劇易を測り、これを弧に作つて見たに二十八日毎に弧線が跳上する、二十八日は即ち太陰暦の月に当る、然し真の月輪満虧に

は関係せずネルソンは是れを以てハムモンド Hammond の曾て信じた「男子月経」 Katamenia masculina の明証と云へり。

この消長はまた一年の中にも見えて三四月の弧線は尤も低く十一、十二月は尤も高し（Americ. Journal of Psychol., I, 3.)

これと趣を異にしたるものはニツツアーの人マカリオ Macario が病人の夢の検究なり未だ閾を越えて識界に入らざる痛楚、不仁等も眠つて居る間休む調停作用のお蔭で夢に顕はれる即ち所謂病兆夢 Préd. de Paris 1888 & 1889.)

底本：「日本の名随筆14　夢」作品社
1984（昭和59）年1月25日第1刷発行
1985（昭和60）年3月30日第2刷発行
底本の親本：「鷗外選集　第二一巻」岩波書店
1979（昭和54）年9月
初出：「衛生新誌」
1889（明治22）年9月
入力：土屋隆
校正：門田裕志
2008年1月15日作成
青空文庫作成ファイル：